

片山 耕二郎



『遠読 ＜世界文学システムへの挑戦＞』（みすず書房、2016年）

著 フランコ・モレッティ

訳 秋草 俊一郎、今井 亮一、落合 一樹、高橋 智之

訳者はあとがきでこう述べる。

しかし、注意しなくてはならないのは、モレッティは、精読を否定しているわけではないということだ。重要なのは、精読と遠読の分業なのだとモレッティは主張している。

しかし、モレッティはこう公言している。

精読と遠読は相互補完的なのか、両立できるのか、相容れないのか？ モレッティはまさか本気で本を読むことをやめさせようとしているのか？ などなど。たしかに私はやめさせようとしてきたわけで、不平不満をいうつもりはないが、このような批判はとりたてて面白いものではない。（「始まりのおわり」解説）

別の箇所ではより挑発的である。

そして、きみが比較文学者になるのは、非常に単純な理由からだ——自分の観点のほうですぐれていると確信しているからだ。説明能力も大きいし、コンセプトの上でもずっとエレガントだ。それに、あの醜い「一方的で視野の狭い心」をまぬがれている、などなど。重要なのは、世界文学研究を正当化するには、これ以外に方法はないということだ（比較文学科の存在理由も）——苦勞の種であり、各国文学（とりわけ地域文学）への永遠の知的挑戦であるのだが。もし比較文学がこうじゃないなら、それは無だ。無。「自分自身を欺くな」。スタンダールは、自分のお気に入りの登場人物にあてて書いている。「きみにとって中道なんてないんだから」。同じことが私たちにもあてはまる。（「世界文学への試論」）

この引用はモレッティが、文学を波のようなモデルとして（世界文学的に）捉えるか、樹形図のようにして（地域文学的に）捉えるかについて述べたことだが、モレッティにとって世界文学研究は対象の多さから必然的に遠読を要請するものであるため、彼はここで、世界文学を遠読することが地域文学の精読研究よりもエレガントだと述べていることになる。

しかし、そもそも「遠読」とは何か、なぜそれが世界文学研究には必要なのか。そして、本書

とモレッティを知り抜いた訳者はなぜ敢えて冒頭の主張をするのか。

本書の題名について考えることから始めよう。「遠読」とは？ これは上記の引用でご想像のとおり、「精読」の対照語である。つまり、広く浅く読んで、その広さのメリットを活かせば良い。本書に収められた論文の範囲で具体的に例を挙げれば、ある時代の推理小説を、「手がかり」の有無とその性質にだけ注目して濫読すること、ある時代のヒット映画のハリウッド率を各国ごとに比較すること、自分の読めない言語作品を二次文献だけを頼りに比較研究すること、ある時代の小説の題名だけを徹底的に収集すること、ある演劇や小説の豊富な情報から人間関係（ネットワーク）だけを機械的に抜き出しチャート化すること、などである。

次に日本語訳につけられた副題の「＜世界文学システム＞への挑戦」について。まず「世界文学システム」は、歴史学を刷新したウォーラーステインの「世界システム論」を文学に応用したものであり、つまり各国・地域文化研究では見えてこない、世界規模での文学の影響関係に着目しようというアイデアである。これに「挑戦」という表現はやや曖昧であるが、モレッティがやってきたことは文学に「世界文学システム（を導入する）挑戦」であると同時に、それがもたらす予想外の結果を前に繰り返し理論を修正する「世界文学システム（に対する）挑戦」でもあるということだろう¹。そのために必要な手法が、作品の膨大な数と使用された言語数に比べてあまりに無力な人間にとっては、「遠読」なのである。モレッティは自身が大変な碩学であると同時に、アウエルバッハやクルツィウス、レオ・スピッツァーといった、この膨大な数に立ち向かった人物を引用してその価値を認めているだけに、その提言には説得力がある。

したがって、この論集は、その新手法「遠読」を導入するため、モレッティ自身がどこに着地するかも分からずに書き続けてきた思考／試行の過程であって、（ヘーゲルの『精神現象学』を教養小説と呼ぶような意味で）モレッティを主人公とした教養小説という趣がある。

そのように捉えたいくなるのは、本書の魅力が、訳者が「どれもが斬新な手法と奔放な発想」と述べる各論文のアイデアそのもの以上に、それを斬新・奔放と取る文学研究者たちを、勇敢に挑発し続けるその態度にこそあると感じられるからだろう。文学研究に自然・社会・情報科学的な外的なモデルを導入するには、文学を愛するがゆえに、自分の愛し方が絶対的だと考えるひとびとの反発と嫌悪も覚悟しなければならない。そして、こうした研究に必要とされる想像力があれば、次のことを予感せずに研究は進められない。つまり、この研究手法（とりわけ計量的研究）が「正しい」として、その正しさが、彼自身も享受してきた読書の楽しみを変える可能性があるということである。

たとえば、仮に私が推理小説を計量分析して、キャラクターの登場頻度において犯人がほぼ3位から4位であることを突き止めたとする。次に電子書籍サービスが、小説内の登場頻度から自動で主要人物表を作ってくれる機能を提供することになったとする（これは有意義な機能だし、固有名詞をとりあげて、それと動詞の組合わせを分析すれば人名のみを抽出できるから、十分あり得る話だ）、すると読者は推理小説をダウンロードして登場人物表を見た瞬間に、犯人にあたりを付けることができってしまう。さらに、その読み方が一般的になれば作家はその裏をかくために、書き方まで変えることになってしまうだろう（推理小説作家がつねに登場頻度を数えながら書くとしたら、なかなか喜劇的ではある）。

あるいは、各作家の文章と一般的なコーパスを比較して、作家の特徴的な表現だけを抜き出し

てくれる機能を開発したとしよう。非常に有意義な機能には違いないが、こうした研究・批評が流行すれば、読者が作家を評価するにも独創的な表現の有無が今まで以上に大きなウエートを占めることになり、作家も自らの才能を示すために、コーパスとにらめっこしながら創作するかもしれない。

あるいは、やがてコンピュータによる内容スキャンの精度が高まった結果、ある本を人間が読んだときどうした感情を抱くか、かなり正確に予測できるようになったとする。このとき、その検査行為自体が読書行為の代替となる可能性さえ——「おい、この本面白いぜ!」「どれどれ(彼はスキャンする)うわ、ほんとだ、面白いな!」——ある。まるでSF小説のようだが、いまでさえ名著や名画のあらすじをまとめた本・サイトの需要があるのだから非現実的な話でもない。このときモレッティの理想とする世界文学の研究は完璧に可能になる。

こうして考えていくとややディストピア的に思われるが、人間はその時代の娯楽を最大限楽しめる柔軟性とふてぶてしさを持つから、幸福な未来が待っているとも言える。ただ、そうした未来への時計をみずから1分進めるより、今までどおり好きな本を精読することを大抵の人間は選ぶと思うのである。とりわけ文学研究を志すほどの読書好きならば。この点でモレッティは小説の登場人物のように勇敢で、見方によってはヒーローであり、しかし悪役でもある。この『遠読』という本は、そうした主人公の挑戦と成長が描かれたノンフィクション小説として読んだとき、もっとも価値があるように思われる。

以下では、各論文の内容を検討する。もっとも、この本は「distant reading 遠読」を提唱したモレッティの著書らしく、「distant readability 遠読可能性」(これはさしあたり私の造語である)が高く、各論文に添えられた著者解説と、巻末の「訳者あとがき」を読めば内容が推察できるから、あまり説明の必要はない。翻訳も4名による共訳とは思えないほどに癖がなく、こなれているから、ここでclose readabilityの不足を補う必要も感じない。したがって、そうした説明・補足の意図がないことをあらかじめお断りしておく。

「近代ヨーロッパ文学——その地理的素描」は、モレッティが世界文学を語るのにまだ正典(カノン)に頼っていた時期のものである。評者は、少なくとも過去の作家について研究するかぎり、それらの作家の共通教養であるカノンの価値を尊重する立場であるし、モレッティが研究してきた教養小説や叙事詩も西洋中世・近代の主要ジャンルとして好んで読むため、この頃のモレッティにはホッとするというのが本音である。正統派の世界文学者モレッティが西洋近代文学にシステムをいくつも手際よく当てはめていく姿は、さしずめピカソがキュビズム以前に分かりやすく美しい絵を描いていた事実のようにして、彼の転向後の論文を説得力あるものにしている。

「世界文学への試論」これは本書を貫く方針を高らかに謳った宣言である。世界文学(システム)に合ったモデルは波である、という理論も世界文学を見つめ直すうえで重要であるが、それ以上に、世界文学研究という広く浅くならざるをえない試みを、はっきり浅くても良いと認めて遠読を勧めているのが画期的である。この書評の冒頭で引用した、世界文学のエレガントさについての一節は、とりわけ読後に強い印象を残すもので、アジテーターとしての抜群の才能を感じさせる。

「文学の屠場」は、推理小説のなかでなぜシャーロック・ホームズがカノンになったのかを調

べるため、当時の同じような境遇にあった推理小説を大量に単純化して分析した、実践式の論文である。結論以上に、まるで作家が自分でも結末の分からない小説を書き進めるような手探りの進行が、本論文をハラハラと読ませるものになっている。論の最後に研究協力者から反論が出され、それをモレッティが認めるという意外な展開は、論文としての面白さを生むとともに、彼の度量の広さを示すことにも成功している。

「プラネット・ハリウッド」は世界各国の映画動員数ランキングにおけるハリウッド映画の割合を調べ、その比率が高いほどプロットに重点を置いた映画が優勢な国であり、国内産が多いほど言語に重点を置いた映画（コメディなど）が優勢な国であることを証明する論文である。著者が回顧して述べているとおり、「それ自体としては、新しい発見でもない」と同時に「なにが新しかったかといえば、実証の明白さだ」である。実に遠読可能性が高い論文だ。

「更なる試論」これもマニフェストである。モレッティはいろいろなところからモデルを借りてくることを提案し、それらの内容は批判され修正される。ベストに辿りつくところを読者は目にしないが、実証主義的な科学としては前進ではあると、そうモレッティは誇らしげに言うわけである。ヘーゲルの弁証法を思わせるところもある。

「進化・世界システム・世界文学」これは題名からして遠読可能性が高い。少しだけ補おう。「進化（論で18世紀まで）、世界システム（論で18世紀から説明がつくのが）世界文学」である、とうなる。何度でもモレッティはモデルを提示する。それを修正するのは他のひとの仕事である。とはいえ、そろそろモレッティにも飽きが見られるようだ。彼は回顧のなかでこの路線を放棄した理由を、「計量的研究の重要性が増した」ため、「理論的枠組みの必要なことなんて数年のあいだ忘れていた」からだとしている。実に正直で好感が持てる。彼はマーケティング論で言うところのイノベーターなのだろう。流行るころには関心はよそに移るのだ。

「始まりの終わり——クリストファー・プレnderガストへの応答」は、モレッティの大風呂敷に対して的確な指摘をされたことについての回答である。モレッティの時間の無駄遣いのようにも思える、というのも議論が些末だからではなく、プレnderガストのほうが論理的に正確だからであり、モレッティの才能は修正より発見をすることにあるからである。ジャンバッティスタ・ヴィーコならクリティカとトピカと呼ぶところで、モレッティはトピカの才に恵まれるからこそ、クリティカ的な検証を引き受けてくれる批評家や、計量的研究を歓迎するのだろう。

「小説——理論と歴史」は中国小説を扱っているが、モレッティが中国について語る際の知識不足については、訳者からの的確な指摘がなされている。とはいえ、そうした指摘を恐れて誰もが触れてこなかった領域だからこそ、モレッティのように、失敗して叩き台となる人物が必要なのだろう。その意味で、このエッセイは大変魅力的な失敗作である。それは魅力的な成功作よりもときに価値がある——なぜなら成功作は発表されるが、失敗作はしばしば、どれだけ興味深い要素を含んでいてもタンスの奥にしまわれてしまうからである。自覚と誇りを持って失敗に飛び込む彼の作法こそが斬新であり、このエッセイを魅力的にしている。

「スタイル株式会社」はモレッティが踏み出した「計量的研究」の実践例である。計量的研究という方法を手にしたから試してみたのだ、ということが伝わってくるし、モレッティの言う「解釈ではなく説明」という手法の実践例として読者は読むことができる。つまり、筆者のある一貫した見解が述べられているのではなく（興奮するような仮説を用意しての調査ではなく）、事実

と分析がたんに羅列されているだけだということである。計量的研究は、目的ではなく手段として用いられ、文系的に興味深い研究を（そして魅力的な新しい「解釈」を）提供してくれるし、モレッティの素養もそうした仮説を用意することに向いているようだが、仮説の提出に飽きた彼がここで目指しているのは、あくまでデータを眺めるところから開始し、データが原典であり研究対象であるような作法で、新たな研究の可能性に挑むことなのだろう。

「ネットワーク理論、プロット分析」についても同じである。モレッティは、こう述べる。「ネットワーク理論を（誤）使用して作品内の証拠にいくばくか秩序を与えたが、こちらへ来いと差し招く道が、分析をそちらへ進めることも辞さなかった」。文脈からこの「こちらへ来いと差し招く道」が「直観」を意味していることが分かる。そして次の文では「直観こそがよきものであるが、概念はもっとよい」と述べている。つまり本書は、遠読することで得られる「概念」の素晴らしさを訴えながら、武器としては直観（あるいはトピカ）を使い続けたモレッティの、憧れと実践の記録だということである。著者本人が未来の研究を楽しみにしているとおり、この本は経過報告書に過ぎないが、もし「遠読」が一般的な研究方法になったときには、本書が古典的名作として再評価されるだろう。その際、未来のパラダイムに生きる読者が胸に抱くのは、この研究者の知性への尊敬にもまして、この探検家の情熱への感動ではないかと思う。

最後に「訳者あとがき」について。冒頭の引用から分かるとおり、訳者は精読と遠読、双方のメリットを認める立場であり、本書のなかでモレッティが遠読ゆえに犯した過ちについては精読・地域文学研究の見識を利用していくつも指摘している。モレッティの態度を踏襲するというより、一歩引いた立場であるように見える。それはなぜか。

これは想像になるが、訳者は本書を読み解いた結果、モレッティが過剰なまでに遠読を称揚するのを本心とは取らず、むしろ現在の研究におけるパワーバランスを変えるために、あえて徹底した遠読の旗手としてパフォーマンスしていると捉えたのではないか。小説の登場人物のように振る舞ってきたモレッティなら、これは十分ありうることである。もしそうであるとすれば、モレッティの意図は、まったく遠読派で世界を満たすことより（かりにこの世が遠読に満ちていたなら、精読の旗手となっていそうなのがモレッティという人物である）、精読一辺倒な状況を覆すことにあることになる。こう考えるならば、訳者が本書をただの遠読の勧めとは解さず、「重要なのは、精読と遠読の分業なのだとモレッティは主張している」と大胆に述べたのも、一理ある判断だと、そう思われるのである。

註1. ただし、モレッティにとって、「世界文学システム」への挑戦は「遠読」に辿りつく契機ではあるが、あくまで「進化論」と対等なモデルのひとつに過ぎず、さらに後半では「遠読」と相性の良い「計量的研究」に専念する。このため、厳密には本書を貫くのは「遠読」のみに思われる。